

岩崎谷の洞に題す（杉 聴雨）

百戦功無し 半歳の間

首邱 幸に 家山に 返るを 得たり

笑う 儂死に 向んとして 仙客の 如し

尽日 洞中 棋響 閑なるを

百戦無功半歳間 首邱幸得返家山  
笑儂向死如仙客 盡日洞中棋響閑

解説 西南戦争で敗退し、岩崎谷の洞窟にこもった時の西郷翁の心中を詠んだもの。

語釈 ※首邱もとを忘れないこと。キツネはもと住んでいた丘の方に首を向けて死ぬという。故郷を思うこと。※仙客＝仙人。※棋響＝囲碁の響き。

通釈 半年の間、幾度も戦ったが、成果を上げる事は出来なかったが、幸い狐が死んで故山を向くたとえのように、故郷に帰る事が出来た。しかし、今、正に死に向かっているのだが、不思議と仙人のように落ち着ており、自然に笑う事ができています。終日、洞中で碁を囲み、その響きはいかにも静かなのである。